



狂歌題目録

浪花の梅 五之卷

- | | | |
|------------|------------|-------------|
| 〔百四〕 大川納涼 | 〔百五〕 有馬富士山 | 〔百六〕 釣鐘堂 |
| 〔百七〕 露天神 | 〔百八〕 天狗瓦 | 〔百九〕 藤の棚 |
| 〔百十〕 長繪馬 | 〔百十一〕 郭公 | 〔百十二〕 梅塚 |
| 〔百十三〕 牡丹花 | 〔百十四〕 野中松 | 〔百十五〕 三番萩 |
| 〔百十六〕 豊崎宮 | 〔百十七〕 鶴八幡宮 | 〔百十八〕 鶴満寺 |
| 〔百十九〕 野田の藤 | 〔百廿〕 浦江杜若 | 〔百廿一〕 大くもの松 |
| 〔百廿二〕 釣鐘火 | 〔百廿三〕 二名橋 | 〔百廿四〕 鶉の森 |
| 〔百廿五〕 義心古跡 | 〔百廿六〕 矢頭塚 | 〔百廿七〕 尻まくり |
| 〔百廿八〕 初天神 | 〔百廿九〕 新土堤 | 〔百卅〕 梅櫻松竹 |
| 〔百卅一〕 開運牛 | | |

合百三十一ヶ條

以上廿八ヶ條

浪花の梅 五之卷

百四

難波橋北詰西にて近年より涼みあり名月のころまでも毎夕賑はしく此岸へわけて河水清流にして眼前に數艘の舟數品の花火へ天に登り地水をくぐりたく人のたのしみたかぬ人へなをたのしみつきぬ一興天満宮の祭禮にハ隨一の拜見所なり茶店にハ餅茶麥茶はつたい茶豆茶香煎茶山吹茶やうのものを夫々のこのミに應すあんまとりハ涼みながら自由なり其外商ひ店年々増長して涼む人も羣集せり

百五

同橋の中ほとより西北の方の山の間に有馬の富士山見ゆるこなたの大川にハ田子のうら川あり東はるかに三保の松原と思ひ山のかたちハまことのふじ山にすこしハ似たか三なすびのはつものハ市場に高下をあらそひ雪ハふりつゝの言の葉もきかねバ夢に見たといふ咄もあらず只所ひいきして

東路の名に大川のなにははしあれくむかふにありまふし山

百六

北野長池藤井寺の釣鐘堂ハ土ぬりにてめつらしく

人ことにあらめつらしやあらかね堂つちてぬつたハこれもうせい

百七

露の天神宮ハ世におはつ天神と申御社内萩の盛りのころ

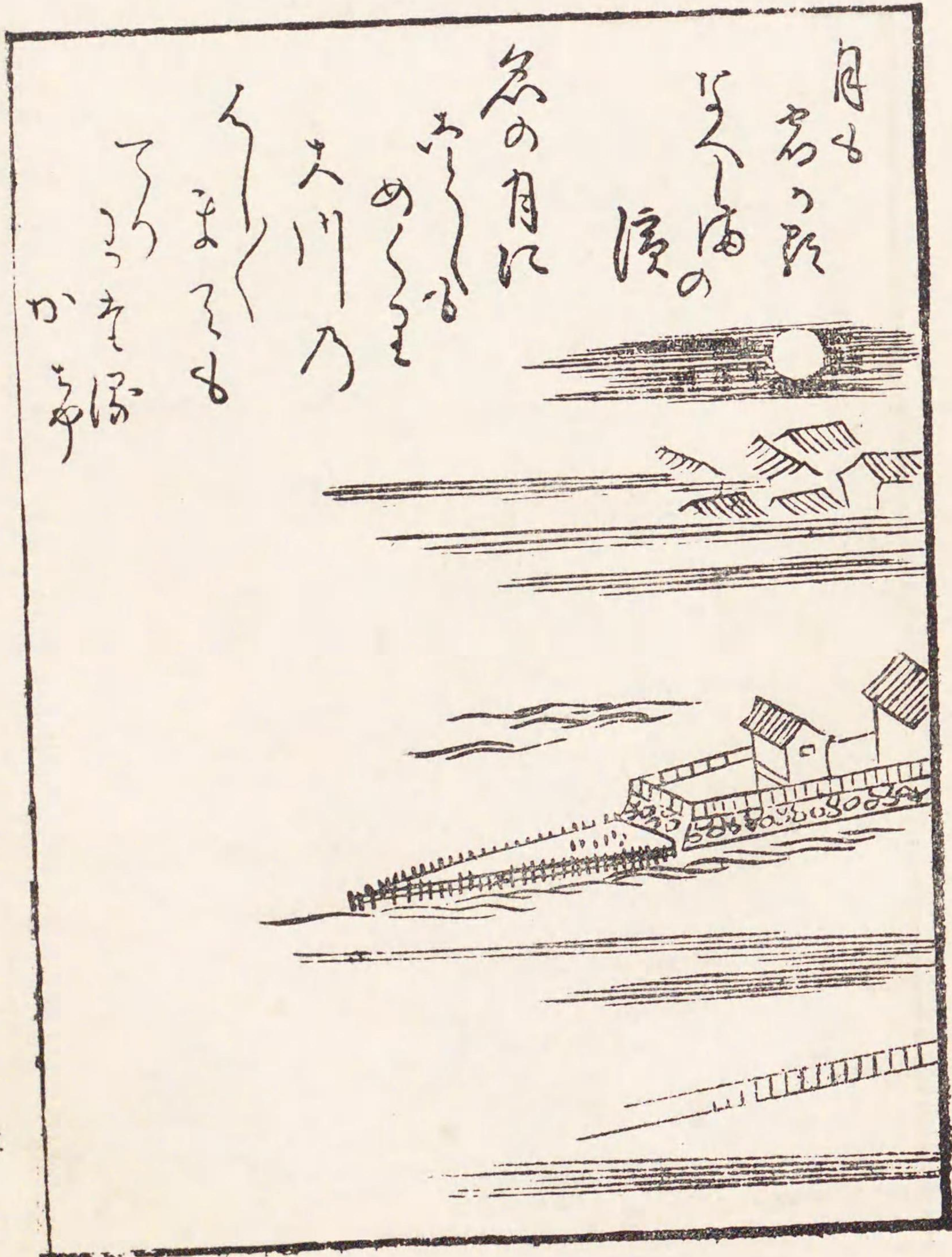
咲匂ふ萩の葉ことのえら玉や自由自在なつゆの天しん

百八

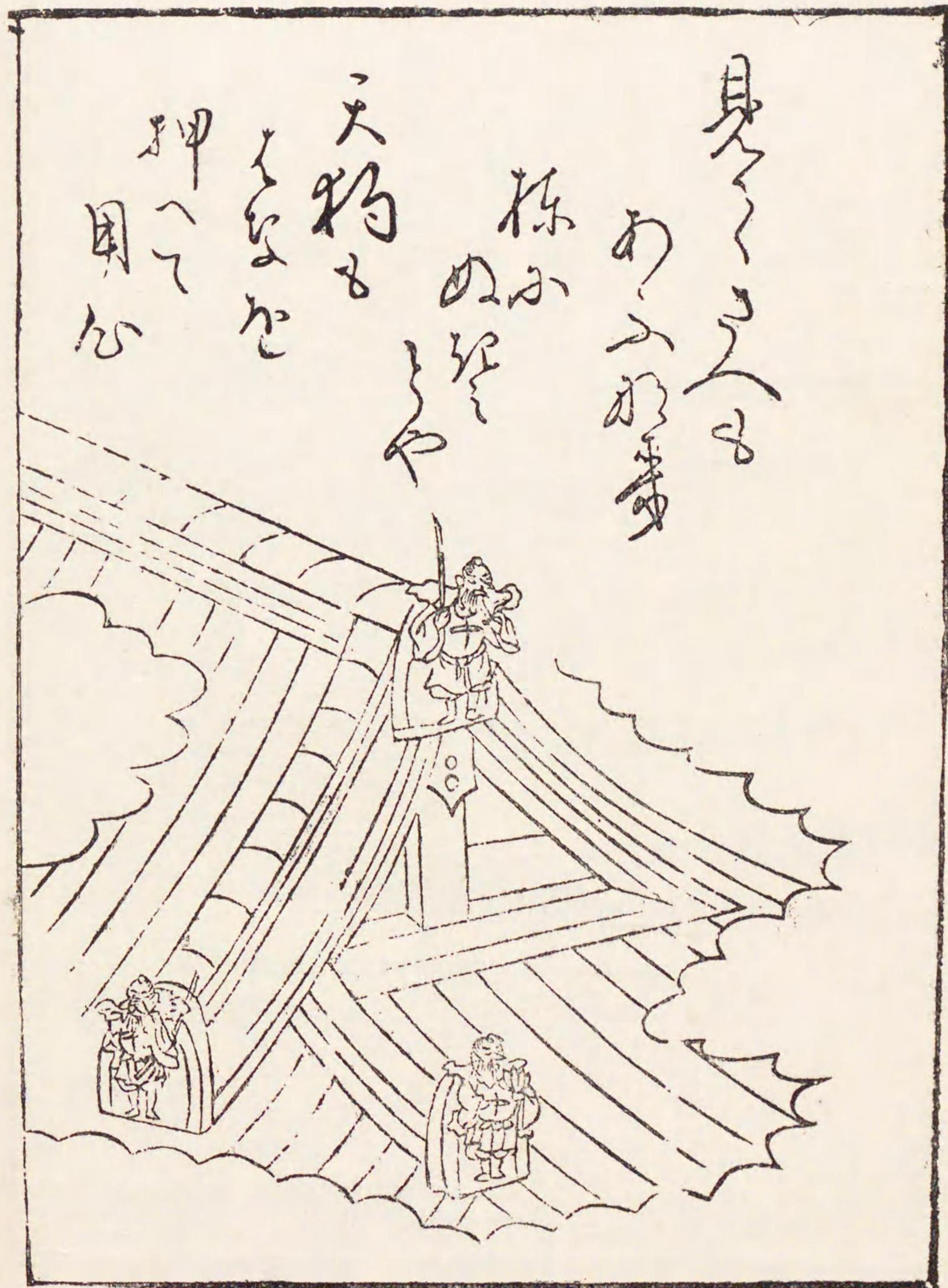
不動寺本堂の瓦に四天王のぬき身してゐる又天狗が鼻おさへる瓦もありはなはたおかし



涼風を
 まらぬ
 常々
 桑ハ
 御
 今
 昔
 今
 昔
 今
 昔



月も
 急の月
 大川乃
 月も
 急の月
 大川乃
 月も
 急の月
 大川乃



百九

大融寺地内に見事なる藤のたなありさかりのころハ羣をなす由縁齋翁の哥に「鹽かまのむかしの春にかへるかとなかめてとほる寺の藤なこ

百十

地内今の庚申堂に誹諧の五萬句の勝句五百番の繪馬浪花の點者鹿嶋白羽翁評なり堂の家根の兩方へ繪馬の端出て長サ凡八九間もあり奉納願主津田氏延女とあり是より世に五萬翁白羽と呼ぶ

五萬句のくふうめくらし長々となき繪馬をはかけたてまつる

百十一

同寺にて那知山の開帳のおり時鳥を見せけるに毎日の數聲に昔ハ聞にきたの、ほと、きすの一聲さへきかまほしきとよもしも聲聞さへ稀なれハかたちを見る事ハ及さる昔を思ひ見る人聞人日にまさりけれハ

澤山にない靈寶やほと、きすきかせにきたかきんにきた野か

たま／＼に聞にきたのいよけれともほつと、きすや見てそかしまし

百十二

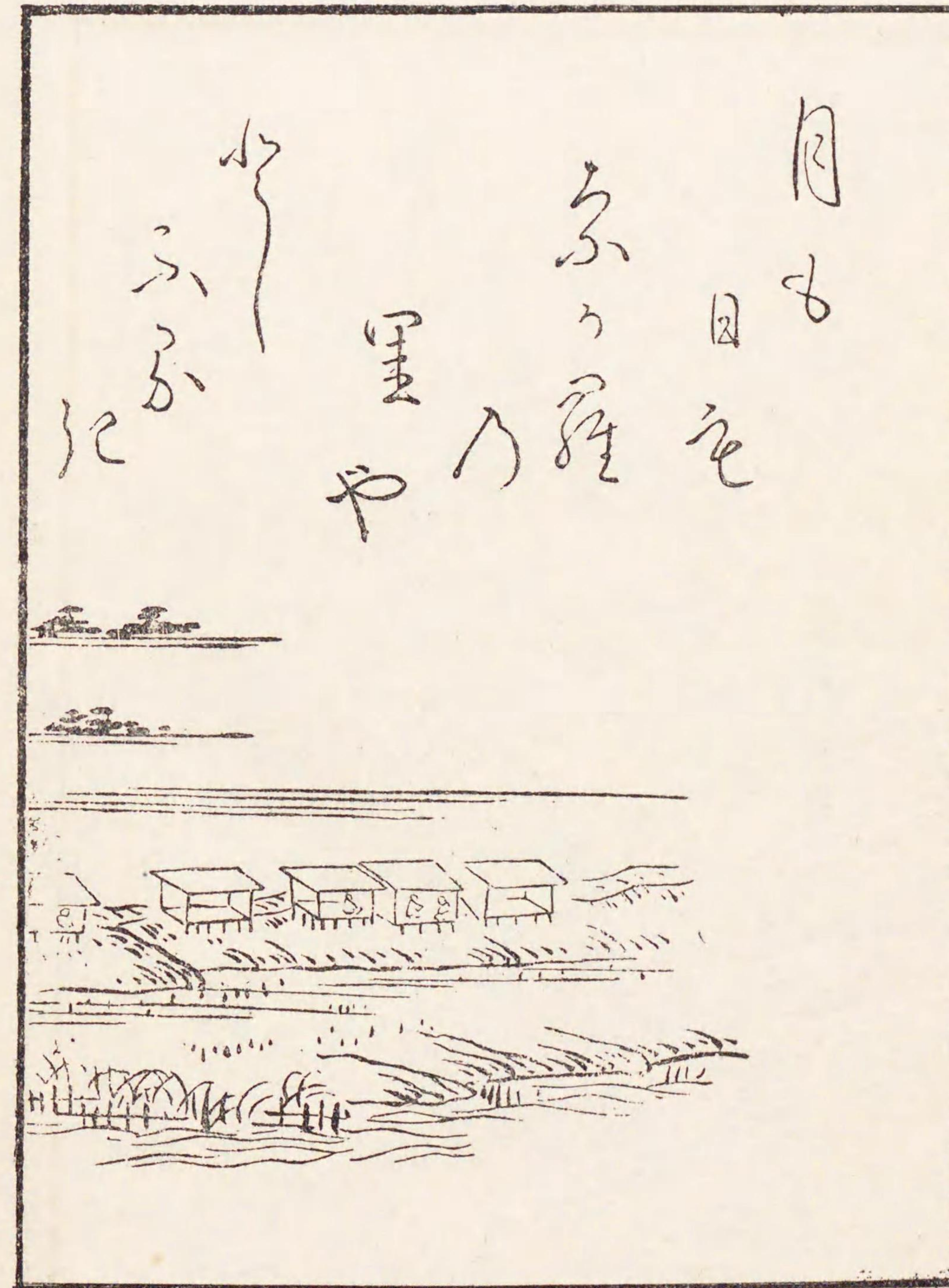
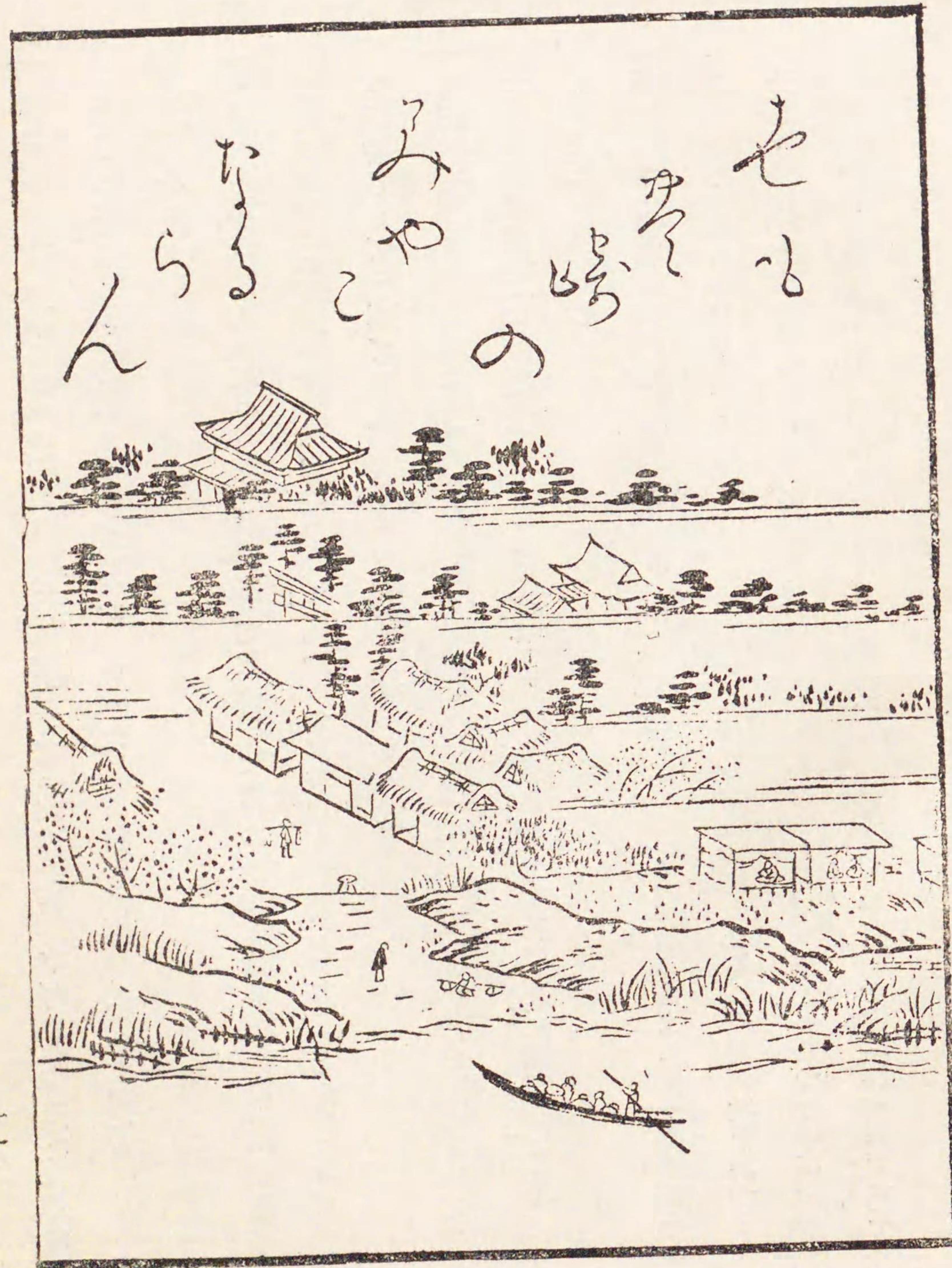
常安寺の地内に年ふりし古木の紅梅あり梅塚といふなり北野天滿宮の御神木なり當御社内に往昔一夜の内に松七本生ひ出し古木今に青々たり

色と香につれてきた野の常安寺こと葉の花もこゝに梅塚

百十三

同御社内少北植木屋の牡丹の花ハ年毎に遠近の遊人羣をなす





百十四 同二丁餘り北の野中に古木の松ありもとに小祠有て昔ハ此所へ參詣多しとそ其ころよみ人あらず「千とせふる松に壽命をことふきてねかひをかけるこんけんの宮年々枝葉さかへ十かへりの花の春はみとりの色をます

百十五 三番村の東光院の庭の萩ハ名所の數種を植て秋ハ見物おひた、しく花の紫に朱ぬりの辨當をひらき置露ほどのまぬ下戸も萩の色をあらそひよれつもつれついと萩のいとまほらしき花にぞありける
名にめて、三番さうてう來てみれハ鈴とあさむく萩のうハ露

百十六 本庄村の森に宮あり此社地ハ孝徳帝難波の長柄豊崎に都を移し給ふとの皇居の舊跡なり近年此宮居の左右に紅葉を植るながめ遠近よりあゆみをはこび來る輩多く或ハ北なる堤に出で童ともうきを忘る、榮花ならんかし

百十七 南長柄村八幡宮の神木に延享元年五月中旬に鶴鶴の子をそたてるをよみ人あらず「鶴もすをかけすハこうも見られまし今もなからにつ、く人はし又「吹風も納る御代の松枝に千代の數そふつるのミと子兩首の哥ハ此松の下にて賣弘し繪圖の歌なり又其ころはやり哥に延享元年さつきのかなかバ津の國ながらの八まん鶴かすごもりするふなまんぢう此哥をうたひしなり年月をかぞふれば五十六年餘になる此宮居に詣て昔を思ひ出しつるのまつに



百十八 同鶴の八幡宮につ、き鶴満寺といふ近代造立の寺あり天台宗にて江州坂本西教寺末寺なり鶴満寺ハ鶴の巢籠より前年に此所へ地を定め則寺號も鶴満寺といふハ古名なりとぞ其後八幡宮へ鶴か巢をくみしなり全く寺號によりて鶴の來りしか前評とやいはん又寺内の堂の彫物に猿が鉦をはり念佛申所あり是ハ本寺の西教寺に昔念佛退轉せしかハさるあまた來りて鉦をはり念佛申ていをなせしより古例により

ての彫物なり當寺つりかねハ長門の浦にて引上し鐘にて銘ハ天平とやらかすかに見ゆるよし其後引上しハ四百餘年になるとぞ其時の銘ありかたちハ尾上のかねのことくにてはるかにちいさしとぞ
なからへハなからの里に年ふりし千とせの松に鶴みつる寺

百十九

野田村藤菴ハ豊臣公御遊覽の節曾路利も御供仕來りしとや當所の藤の花ハ往昔より都の高雄の紅葉に
ならぶ名花なり今に至るまでさかりのころハ見物羣をなす津の國壽衣の玉川といふも此地内にあり
一松風の音たに秋ハさひしきに衣うつなり玉川の里とよめる古歌も當所のことなり

百廿

浦江村了徳院地内の杜若ハむらさきに白をまじへ池中に花のいろをあらそふなかめのつきぬたのし
なり

紫に白のうら江のかきつはた花のすかたも水きのかたつ

百廿一

小曾根村涉場より北の堤の竝松の中に大蜘蛛の松とて大木あり此古木の松より西の方天竺川の松へ昔
大くも巢をかけ鳥けだ物を取喰ひ往來の人にさまたけをなすにより是を退治して後より今に至るまで
大くもの松といふとぞ

目をむいてとり喰ふとも人にあはれなんのくもなしくもの松かえ

百廿二

攝北池田の山に釣鐘火とて文月の火を燈す事京の大文字火のごとし昔此邊りの富家に老母一人住て平



海士乙女行て
あまねて人の
むらさき
今こころの
野田の松
玉川の里
好

生申やうへわれ過行し跡にて残りし金銀を以て毎年七月十六夜に釣鐘のかたち山へ火をてらし給へ
れとねんころに頼過行し其詞に随ひとふらひのため昔へ毎年執行ありしも年ふりて今へ豊作の年山へ
火をてらす此夜へ三四里も外より見るに誠の釣鐘のことしとそ

今の代ものりの縁をいつりかね火をてらすの彌陀の光りなるらん

百廿三 上福島正福寺地内の石はしに岡橋春曙橋の二名あり

心なき人もころをおか橋やわたりて見れり春のあけぼの

百廿四 同掾起寺地内にかさゝきの森といふあり

百廿五 元禄年中義心天野屋何某の古跡とかや

かさゝきの森の松かへ幾千代も天の川にそのこる大ほし

百廿六 元禄年中矢頭長助といふ義士あり始に梶原氏にて矢筈の紋所なり後主君の命によつて紋所を名字に矢

頭氏と改大坂北邊に借宅をして病死す後高松の隠士河内正佳といふ人上福島淨祐寺に石碑を立る本

堂のうしろにあり

其むかし義心の重き石塔も今まのあたりてうすけて見る

百廿七 諺に尻まくり御法度けふ廿五日とわらんへの遊言はむかし天満天神宮の邊りの百姓の家多くして町



家へすくなき時毎月廿五日ハ御縁日ゆへ百姓農業を休てる折ハ一軒にても農方へ出るに尻からけする人を見つけるとやすみある百姓より申やうハ廿五日の休なるに尻まくるハ御法度しやといふて農方へ行をとめしとそ

百廿八

早春にハ初天神とて詣て来る諸人往來せましと押合ふありさま年毎にかハらぬ御神徳申も恐れあり御社内の小山やといへる茶店に腰をかけやすらふ中にも遊女多きに參詣も心迷ふそおかし、
のほりつめた客にひかれて坂町のおやまかたんと小山屋へよる

百廿九

近年御社内にあらたなる土堤に樹木四季のなかも盡せし

百卅

同土堤南の穴門の石に梅櫻松竹の文字をほりいれあり菅神御愛樹の名によりてや一説に此石ハ青物市場の民家に年久しく有しを奉納せしともいふ

梅も飛ハす櫻もかれす松竹もいはほとなりてあな貴とけれ

百卅一

御社内に開運の牛あり往昔土師連吾筈といふ人土器の細工人を山城の伏見村に住しめ稻荷山の三ツの峰の土をましへ今の代まで傳はりて伏見街道の土細工狐西行布袋牛品々の人形器物等造りて業となす事年久しき産物なり中にも牛の徳をかそふるに貴人高家に近くめされて御車の役をつとむ五條の橋の牛若丸ハ名にあらハれ根來山に牛谷の名をのこす農作に百姓の肩を休めさんろハ腰を休む番匠ハうし

ひきの上棟を祝しひく手あまたの牛はくろ牛市商人ハ牛のよたれを忘れす牛のふんをつくねたやうにくらかりからひきたす牛のねたほとかねをまうけなハ牛ぬす人にあハん九牛か一文商内早牛も遅牛もめくる車牛唐の人の牛洗ふよしあしハいはぬもつらしいふも牛ハ牛つれうしの日祭七夕祭に心を清め干牛丸にハ病をはらひ牛瀧山におもてをてらし牡丹花ハ牛の角に箔をかざりうしと見しながら女のうしろ帯に心迷ひ丑の時参りの性惡に此世から牛となりうし鬼のせめをうけ牛にひかれて善光寺嵯峨に牛のけまんとおがまれ牛が哥よみ白太夫ハ牛の講釋を菅家に傳へ奉る今浪花の天満御社内に左り向のうしの開運の像あり

左りむきなつともつきしさゝれ石いはほとなりて開運のうし

五の卷終

浪花の梅は家書に父梅好を以て孫月を以て雪乃
 ふりて梅好中に母を以て梅好雅物古蹟を以て梅好狂
 梅好一梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好
 玉の梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好
 かに梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好
 梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好梅好

白縁齋一子

玉縁齋壽好

寛政十一年未仲秋

撰者 陰山白縁齋
 筆耕 風竹館芦郷
 畫工 陰山 玉岳
 寛政十二年庚申正月吉日

京師浪花書林

寺町通五條 殿 爲 八
 六角通御幸町 小川 太左衛門
 心齋橋北久大郎町 柳原 喜兵衛
 心齋橋安堂寺町 田村 九兵衛
 心齋橋膳所 玉置 清 七
 九條本田 堀 伊兵衛
 今橋二丁目 陰山 三郎兵衛

插圖目次

難波	京(14-15)	今宮	夷(18.....)	逢坂の清水(20.....)
松蟲塚	(21.....)	一心寺	(22-23)	安居の天神(27.....)
眞清	水(30-31)	大江	岸(32-33)	あやうまん院(35.....)
天王	寺(33-41)	庚申	堂(43.....)	舍利寺(44.....)
住吉	(50-53)	津守	寺(58.....)	靱松原(60.....)
遠里	野(61.....)	飛田	(63.....)	阿部野王子(65.....)
小塚	(67.....)	たみの	鳥(72.....)	新御靈(73.....)
難波の御堂	(74-75)	津村の御堂	(78-79)	座摩宮(81.....)
稻荷宮	(83.....)	鹽町藥師	(85.....)	瓢箪町(88-89)
白髮町觀音堂	(91.....)	三津寺八幡	(93.....)	四橋井阿彌陀池(95.....)
道頓堀	(93-99)	千日寺	(100.....)	玉造稻荷(106.....)
森明神	(108.....)	國分寺	(110.....)	遍明院(111.....)
大連寺	(113.....)	淨國寺	(114.....)	專修院(117.....)
生玉大明神	(119.....)	高津宮	(122.....)	本覺寺(124.....)

藤 棚(126……) 朝 日 宮(127……) 蠟燭町神明(129……)
 籠岸井渡邊(130……) 難 波 嶋(136……) 三 軒 屋(137……)
 衢環嶋并竹林寺(139……) 茨 住 吉(141……) 龍溪禪師庵(143……)
 天神御旅所(144—145) 野 田 藤(147……) 傳 法(149……)
 姫 嶋(150……) 曾 根 寄(156……) 堂 嶋(157……)
 大融寺御幸(158—159) 大融寺附神明(161……) 北 野 天 神(163……)
 女 夫 池(164……) 鶯 塚(166……) 長柄釋迦堂(168……)
 崇 禪 寺(169……) 長柄大願寺あと(171……) 三 寶 寺(173……)
 母 恩 寺(175……) 天満宮附星合池(176—177) 東照權現宮(179……)
 氷 様(198—196) 正月門々のかざり禮の所(201……) 住吉の神前御くらそのふる所(203)
 天王寺太子堂御くら御鏡の事(205) 子供はねつき玉打所(207……) 道頓堀初芝居(210—211)
 住吉あをはの神事(214……) 正月 七日七草(216……) 大ゆふ寺とみをつく事(217……)
 住吉ちん宮寺やくし堂法事(220) 十日ゑびすの事(222……) 住吉の御弓の所(223……)
 さきてうのばの所(225……) 住吉四社の御くら(230……) じりやうノ宮ノ所(231……)
 ゑん清水のて(232……) 天王寺涅槃會(235……) 天王寺六字堂れんぢのま(237)
 天王寺くわいろうの花見(239……) ひやうたんまち(242—243) 三月鳥合のて(244……)

住吉ちほひのて(246……) 大師みゑいくの事(248……) かういあをばのすたれ(254—255)
 天 わうじ金堂(256……) 玉作いなりの神事(258……) 住吉うの花まつり(260……)
 東照こんけんの社(262—263) 五月五日のちまき(265……) 住吉御田う(267……)
 ちやうまんぬん(268……) 大内かまやうぐい(270……) ざま御はら(272……)
 天神の御たび所(274……) すみ吉の神事(276—277) 千日寺とらう事(282……)
 たごり(御せん)のて(283……) 七夕のそなへ物之事(286……) 御城御番代(288—289)
 ぼんおどり(290……) 東本願寺御とらう(292……) 西本願寺御とらう(293……)
 ちちの地蔵まつり(294……) 三津寺八まんの神事(297……) 難波堀江月見(299……)
 九月九日きく水ゑん事(304—305) 生玉のまつりの所(305……) 高津の神前にてすまふ(308……)
 住吉たからの市の所(310……) 天王寺れいしんのまひの事(312) らうそく町神明のさ(313……)
 今 宮 の せ(315……) いなりの御かくらの所(316……) 天満天神の矢ぶさめ(318—319)
 九月きくの花ゑん(324……) 十月いこの事(325……) 東本願寺御佛事(328……)
 西本願寺御佛事(329……) 天王寺さの神まつり(332……) からちん堂ゑん日の所(333……)
 ちんくうしの佛きやう(334……) 大内せつふんの事(336—337) 浪花十六橋(402—403)
 やぐらやし(405……) 座摩社并東本願寺穴門(408—409) 京 橋(410—411)
 有 馬 富 士(412—413) 京 大 文 字 火(414—415) 鯉塚の由來(418……)

十三 開梅 (424-425) 貳 百文 (428-429) 短册 塚 (432-433)
 道の邊の柳 (434 ……) 地藏堂と庚申塚 (437 ……) 姉川新四郎櫻 (438-439)
 石の宮 瓦 (441 ……) 鴈金文七の畫 (446 ……) 芝居と南地の涼 (449-452)
 今宮村 (454-455) 龍の石 (457 ……) 相生の松 (458-459)
 鮑貝の窓 (462 ……) かまやの柳 (463 ……) 阿彌陀池 (464-465)
 解船町の雪 (470-471) 龜の松 (472-473) はだし藏 (474 475)
 玉江橋 (478-479) と っ し (480 ……) 本庄の森松 (486-487)
 雪 鯨橋 (498-489) 長柄の橋板 (490-491) 長柄の橋杭 (492 ……)
 手水鉢 (493 ……) 大溝の中の額 (508-509) 初弘法のなげ橋 (515 ……)
 希代杉 (512 ……) 八里半 (514 ……) 小橋の松 (522 ……)
 桃の花 鉦 (516-517) 玉造高臺 (520-521) 高津の雪 (530-31)
 石の梅 (532 ……) 相生松 (524 ……) 鬼の目なし (534 ……)
 浪花の籠 (535 ……) 百足瓦 (533 ……) 浅黄櫻 (538 ……)
 石燈籠 (535 ……) 高燈籠 (537 ……) 浅黄櫻 (538 ……)
 笑 鬼 (540 ……) 三味線 塚 (541 ……) 月江寺 (542 ……)
 一日十景 (544-545) 琴塚 (548 ……) 清水寺 (551 ……)

佛足跡 (553 ……) 長石塔 (554 ……) 紙子佛 (556 ……)
 五葉松 (558 ……) その女の店 (561 ……) ころゝや (563 ……)
 古物の手水鉢 (564 ……) 連理樹 (565 ……) 柿の石燈籠 (569 ……)
 西行 畑 (570 ……) 浦嶋の子 (572 ……) 難波の杜鵑花 (573 ……)
 柳の清水 (575 ……) 誓文 拂 (576-577) 地蔵 祭 (579 ……)
 住吉 祭 (580-581) 蘆分 橋 (582-583) 香の梅 (585 ……)
 三尊 佛 (587 ……) 入内 雀 (588 ……) 大川の納涼 (592-593)
 天狗 瓦 (594 ……) 牡丹 花 (596 ……) 三番 萩 (597 ……)
 豊崎 宮 (598-599) 鶴八幡 宮 (601 ……) 野田の藤 (603 ……)
 尻まくり (605 ……) 新土堤 (606-607)

『山本洞雲』に就いて

地誌篇^{其一二}の中に収録しました『難波十二景』と『難波十觀』との著者、山本洞雲に就いて、茲に未定稿ながら少しく其の傳記を書きふるして置きませう。

人名辭書や、諸家著述目録によりますと、

山本洞雲、京都の儒者なり、名は泰順、字は三徑、宇都宮由的に學ぶ、漢學を善くし、大極圖說諺解（四冊）、月令諺解（二冊）、和漢兩鏡錄（二冊）、節序詩集（十二冊）、四家絕句（四冊）、山城名所記^{洛陽名所集}（十冊）、和漢印盡（三冊）、三重韻首書（二冊）等の著あり

とあります。古版地誌解題六六頁には

山本泰順は狩野派の畫人友我是尙の子、京都の儒者にて字は三徑、號は洞雲と云ひ、又國風を下冷泉爲景に學べり

とございます。以上の外、洞雲の著書として知られてゐるものに、都物語（十一冊^{寛文九年板}）老子諺解大成（五冊^{延寶九年板}）があります。

從來、發表された洞雲の傳記として最も詳細なものは、森潤三郎氏が書かれた『洛陽名所集とその著者』に就

きて』の一文でございます。それに依りますと、山本氏の系圖は次の通りです。

二

山本氏は清和源氏、新羅三郎義光の裔、義光の長子義業は佐竹氏の祖となり、義業の次子式部承義定、近江國山本——現今の淺井郡朝日村——に居り、山本冠者と稱したのが、山本氏の祖である。義定の子兵衛尉義經、その子義弘と相繼ぎ、九代を経て從五位下佐渡守尙親に至り、文明年中、山城國愛宕郡岩倉郷に移る。尙親の孫對馬守資幹、資幹の子佐渡守尙利、尙利の子若狹守尙俊と相嗣いたが、尙俊の子修理大夫尙治は明智光秀に屬し、天正十年六月十三日、天王山に戦死した。この尙治の子彦五郎富尙、富尙の子は友我是尙、是尙の子は即ち我が山本洞雲である。

さて、洛陽名所集、卷の六、八幡山の條下に『——余いまだ二十に三をくはへし年——』の一節がありますから推して、この書の序文を書かれた萬治元年(我が二三一八 西曆一六五八) 戊戌八月を以て、著者洞雲が二十三歳であつたとしますれば、その生年は寛永十三年(我が二二九六 西曆一六三六) 丙子に當り、難波十二景の開板された延寶四年(我が二三三六 西曆一六七六) 丙辰には四十一歳、難波十觀の世に出た延寶八年(我が二三四〇 西曆一六八〇) 庚申には四十五歳になつてゐる筈です。

所で、同じ著者の筆に成つた、和漢兩鏡錄——貞享三年(我が二三四七 西曆一六八七) 丙寅の開板——の序文の末に『延寶、別杖、春三月、端五浪速教授梅室、叟、山本洞雲編』とあります。この廿一字のうち、別杖の二字は、干支の異名にもなさうですから、推測を下しますと、『別』は『捌』即ち『八』と解し得らるべく、『杖』の字は、『杖家』とつゞいて五十

歳、『杖朝』とつゞいて八十歳を意味しますから、『杖』を『年』といふ義に解しますと、『別杖』は『八年』となりますが、さて『梅室、叟』とある『叟』の字が年齢に比して妥當でないとおもはれて來ます。換言しますと、當時四十五歳であつた筈の洞雲が、『としより』また『おきな』といふ意味の『叟』の字を書いてゐるのに疑ひが挟まれないではありません。まかし早熟であつた斯人が、早く自ら老人の列に入るとの意で、この字を用ゐたものか、それともまた寛永十三年の生れといふことが誤つてゐるのでせうか。これは更に後日の研究に譲ります。

森氏の文に依りますと、山本氏の宗家は京都府愛宕郡岩倉村に現存し、我が洞雲の後は江州に残つてゐるさうですが、延寶四年に四十一歳であつたと推定される洞雲が、難波十二景の末文に隨分永らく浪速に住んでゐるかの如く書いてゐるのから見まして、三十歳前後で大坂に來たのではないかと思はれます。大坂の北草屋町に住んでゐた我が山本洞雲は、越鳥は南枝に、胡馬は北風に、の譬へで、五十歳前後に、故郷戀しく、祖先の發祥地たる江州山本へ隠れ、そこで終つたのではないでせうか。

附記。この『山本洞雲』に就いての一文、材料は凡て鹿田文一郎氏の提供されたもの、予は唯だその材料に

よりて、臆測し、推定して、この稿を綴りました。茲に氏の好意を深く感謝する次第です。(昭和

丁卯七月九日夜、船越政二郎記)

昭和二年七月十六日印刷
昭和二年七月二十日發行

(非賣品)

編纂校訂者 船越政一郎
大阪市西成區松原通二丁目四三

發行者 江崎政忠
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内
浪速叢書刊行會代表理事

印刷者 長谷川泰三
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社
大阪市東成區鶴橋天王寺町五七八五
電話南 三三〇六二番
三七二二番

浪速叢書

不許複製

第十二

發行所 浪速叢書刊行會

大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内
電話土佐堀六六二二番
振替口座大阪七七三六三番

一 本叢書は我等が愛するこの『大阪のため』に生れたのです。元和以降この浪速に關する編著記録のうちから、過去の浪速文化を回顧せしめ、未來の浪速文化を生ましむべき、眞に永遠の價値あるもの——中には未刊行のものが大部分を占めてゐます——を收め、後の世に傳へたい希望の下に着手されたものです。

一 本叢書の題字は、帝室御物聖德太子御筆『法華經義疏』の寫眞のうちから求め出したものです。我國に於ける文化工藝の祖におはすばかりか荒陵山四天王寺の創建者として我が浪速との因縁が頗る深い太子の御筆蹟を、我が叢書の題字とすることを得たのは、本會の誇りと考へてゐます。

一 本叢書は原本の挿圖を一枚も省略せず、力めて原本の面影を傳へたいと心がけてゐます。

一 本叢書の用紙は王子製紙株式會社の別漉紙で、成るべく讀者の眼の疲勞を輕減したい用意が籠つてゐます。

一 本叢書の組版印刷製版製本これらの技術は桃谷印刷株式會社が其の一切を擔任し、及ぶ限りの努力を惜しまないと意氣です。

一 本叢書見返しの畫は、日本畫壇の異彩菅橋彦氏の筆。表紙の布は、我國織物界の偉材龍村平藏氏の意匠に成つたもので、現に我が讀書界に好評噴々たるものがござります。

一 本叢書刊行會の理事は伊藤秀雄、林安繁、堀越壽助、室谷鐵勝、小林利昌、江崎政忠、木間瀨策三、森下博、末吉一郎の諸氏。顧問は今井貫一、和田萬吉、幸田成友、内藤虎次郎、内田貢、黒板勝美、藤井乙男、新村出、關一の諸氏。相談役は石割松太郎、橋本耕之介、南木芳太郎、上松寅三、佐古慶三、三宅吉之助の諸氏です。(諸氏の姓名はいづれもいろは順による)

浪速叢書

(全拾六卷)

所收目錄

第一	攝陽奇觀	第九	大阪商業史資料
第二	攝陽奇觀	第十	大阪訪碑錄
第三	攝陽奇觀	第十一	大阪訪碑錄
第四	攝陽奇觀	第十二	地誌
第五	攝陽奇觀	第十三	地誌
第六	攝津名所圖會大成	第十四	風俗
第七	攝津名所圖會大成	第十五	演藝
第八	攝津名所圖會大成	第十六	索引



春

